

竹中正治

(龍谷大学経済学部教授)



『なぜ人は市場に踊らされるのか?』

「根源的な問い掛けをテーマにし、ようにしたきっかけは何ですか。」

「なぜ経済は思うようにいかないのか? なぜバブルが起き、バブルだと言いついても手を引けないのか? そんな行動をどう理解すればいいのかを、単純化したモデルなどを使って、私なりに解いてみたかったのです。」

「それに旧東京銀行でデリバティブ取引のディーラーとして常に市場に接していたのですが、標準的な経済学で語られる市場とは違和感がある。現実のマーケットは時には非合理的だからです。ただし、そこにも何らかのパターンはある。」

真の投資家は人と同じことはせず自分で判断

「ついでに、それを考えることが賢い個人投資家を生み、日本経済をよい方向に導くのではないかと思っただけです。」

「バブル、つまり人が市場に踊らされるのは不可避ですか。」

「バブルと調整を繰り返すのは市場経済の必然ですね。そのときにどれだけ賢く振る舞えるかが大事です。」

「ディーラーのようなプロは半年、四」

「半期ごとに成果を出さなきゃいけない。そういう人が大勢を占めるマーケットは放っておけばバブルを起こすのは宿命ですし、分かっているにしても「チキンゲーム」から降りられない。」

「しかし、個人投資家は違いますし、健全な市場を支える究極の投資家は個人です。長いスパンで構えていければいいし、チキンになるのを恐れる必要もない。ウォーレン・バフェット氏はまさに、お手本にすべき存在です。10」

「0分の1でいいから彼の気持ちになれば、違う世界が見えるでしょう。」

「人と同じことをしない、自分の判断で投資するということですね。バフェット氏は2000年ごろのITブームに乗らず、運用成績を下げました。「さすがのパフェットも時代遅れになった」と言われましたが、「自分の理解」

「できない事業には投資しない」と譲らなかつた。その後、ITバブルがはじけて、多くの投資家は損をし、バフェット氏の正しさが証明されました。人と違うことをするには勇氣がいります。」

「ブーム再燃の『龍馬がゆく』(司馬遼太郎著)で、攘夷派が白頭するなかで龍馬が別の道を歩む姿が描かれていました。攘夷派は、観念論にとらわれ悲壯感に走って、最後は散るのを潔しとする。龍馬は違う。そんな龍馬にみんなあこがれているのだから、できるんじゃないでしょうか。」

「勉強も必要ですね。」

「高校、大学で金融・投資の基本を教えるようになってほしい。日本では「投資でお金をもうけるのは卑しい」という風潮がありますが、それは間違っています。経済活動に不可欠な投資をもっと前向きにとらえてほしい。」

「人は理解が及ばないとき、最も俗悪で単純な説に飛びついてしまいます。「悪いヤツがいる」というような何の解決にもならない説に。そういう意味でも経済や金融の基本的な仕組みを知ることが大切なのです。」

「聞き手」中村秀明・毎日新聞編集局



日本経済新聞出版社 1575円

新刊

『グローバル化と日本経済』

青木 健、馬田啓一 編著

文眞堂、3045円

「東アジア経済は事実上、統合が進んだ。今は制度的裏付けとしてのFTA(自由貿易協定)網作りの段階。日本は包括的で質の高いFTAを目指す。だが、深化が進むと、農産物関税、人の移動の問題がクローズアップされる、と分析する。世界経済危機への対応や地球環境問題の影響を含め、グローバル化の日本経済への影響、問題点、課題がトータルにまとめられている。」

『世界クジラ戦争』

小松正之著

PHP研究所、1785円

「長年、漁業交渉に携わり「ミスター捕鯨」と呼ばれた元水産官僚が、捕鯨外交や水産資源活用のあるべき道を語る。「調査」名目での捕鯨の承認に向け、政府内部での調整や捕鯨国間の意見集約に奔走し、下地を積み重ねていく姿に、外交交渉の地道な本質がうかがえる。言うべきことはきちんと言う方が理解は深まる、というのが著者の持論。この当たり前がなかなか実行できていない現実がもどかしい。」

『衆愚の時代』

楡 周平著

新潮新書、714円

「痛快な本が出たものだ。派遣切りは正しい「荒れる学校はメディアが広めた」識者や学者を信用するな「メディアはなぜFX(外国為替証拠金取引)に手を出すかと主張しないのか」大学を出たって人生の保証はない「弱者に寄り添うなどときれいごとを言うメデ」